

# ACP 普及促進専門委員会

## (令和 6 年度)

### ACP 普及促進専門委員会報告書

広島県地域保健対策協議会 ACP 普及促進専門委員会

委員長 本家 好文

#### I. はじめに

平成 25 年度（2013 年度）広島県地域保健対策協議会（地対協）に「終末期医療のあり方検討特別委員会」が発足した。活動目標のひとつに「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）の普及」を掲げ、さまざまな取り組みを始めた。

平成 29 年度（2017 年度）には、在宅医療・介護連携推進専門委員会「ACP 普及促進ワーキンググループ」として活動を継続した。

さらに令和 3 年度（2021 年度）からは、「ACP 普及促進専門委員会」として普及に努めてきた。令和 6 年度の本委員会の活動内容について報告する。

#### II. 委員会、研修会の開催について

◎第 1 回 ACP 普及促進専門委員会（令和 6 年 7 月 17 日）

##### 報告事項

（1）ACP の手引き・私の心づもりに関する実施したアンケートの回答結果について  
「ACP の手引き」を手に取った人の年代は、70 代が半数以上を占めていた。入手機会としては、「研修会」と回答した人が 3 分の 1 以上を占めていた。ACP を知ったきっかけも「研修会に参加して」と回答した人が半数以上を占めていた。また、本手引きを使用された感想としては、90% 以上が「内容が分かりやすく理解できた」と回答した。

研修主催者・申請者に対するアンケートでは、ACP の手引きを知るきっかけとして、地対協ホームページを挙げる回答が多かった。「ACP の手引き」の使用を決めた理由は「内容が分かりやすかったから」が最も多かった。また、初めて手に取る冊子としてボリューム感が良いと感じたという意見も複数寄せられた。

「ACP の手引き」の改善点や要望については、「代

理意思決定者の氏名や続柄を記載する欄があれば良いのではないか」等の意見があり、今後の参考とする。

##### 協議事項

（1）ACP に関する研修会の開催について  
ACP 普及を推進する目的で「人生会議の日」の 11 月 30 日（土）に研修会を開催することとした。事前打合わせで作成した骨子案を提示し、具体的な開催要領について検討した。

対象は一般県民・医療介護従事者・行政職員とし、内容や発表に用いる用語が専門的にならないように留意する。

開催場所は広島県医師会館ホールとし、開催時間は 14 時から 16 時 30 分までとした。

2 部構成で第 1 部の基調講演は「社会医療法人石川記念会 HITO 病院緩和ケア内科部長の大坂 巍先生」に依頼する。

第 2 部のシンポジウムでは、落久保裕之委員が座長を務め、具体的な実践例を通じて ACP の理解を深める機会とする。シンポジストは本委員会から、緩和ケア病棟勤務医の沖政盛治委員、在宅医の丸山典良委員、訪問看護の立場から道法和恵委員、介護支援専門員の越部恵美委員の 4 名とした。

##### その他

広島県地域共生社会推進課から ACP 実践事例セミナー及び、ACP 普及推進員の活動報告について説明があった。また丸山典良委員より千葉大学予防医学センター河口謙二郎氏、塩谷竜之介氏、近藤克則氏の論文「介護福祉専門職のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）ファシリテーターにおける ACP 実践の阻害要因」について解説があった。

## ◎ ACP に関する研修会の開催について

### 概要 (資料 1) チラシ

- ・主催：広島県地域保健対策協議会「ACP 普及促進専門委員会」
- ・開催日：令和 6 年 11 月 30 日（土）
- ・開催場所：広島県医師会館ホール
- ・メインテーマ「人生会議の日、豊かな生き方を考える」
- ・プログラム

第 1 部 基調講演 テーマ「いのちといのちの語り合い」写真 1

講師 大坂 巍（社会医療法人石川記念 HITO 病院緩和ケア内科部長）

第 2 部 シンポジウム テーマ「ACP と歩む人生の物語」写真 2

シンポジスト

沖政盛治（JR 広島病院緩和ケア内科）

丸山典良（まるやまホームクリニック）

道法和恵（広島県看護協会訪問看護

ステーション「こい」）

越部恵美（広島県介護支援専門員協会）

・対象：一般県民、医療・介護関係者、行政職員等

・参加人数：143 名



写真 1



写真 2

### 基調講演

テーマ「いのちといのちの語り合い」

講師 大坂 巍（社会医療法人石川記念 HITO 病院緩和ケア内科部長）

ACP（アドバンス・ケア・プランニング）は医療者と患者が繰り返し話し合う大切な場であり、その実践に際して重要なことは患者と医療者とのコミュニケーションである。日常診療や家庭内においてもコミュニケーションを意識して対話を交わすことの大切さを指摘され、対話する上で必要なスキルについても示された。また家族間の対話のなかで「ありがとうございます」「ごめんなさい」「さようなら」といった言葉を交わすことの重要性も指摘された。そのような言葉が対話の中で用いられることによって、家族の絆が深まり満足度が増す可能性があり「言葉は薬になる」ことが強調された。

### シンポジウム

メインテーマ「ACP と歩む人生の物語」

本委員会から立場の異なる 4 名の委員から、それぞれが経験した事例を中心に紹介があり意見交換を行った。

1) 沖政盛治（JR 広島病院緩和ケア内科主任部長）  
テーマ「療養を支える～患者の立場、介護者の立場～“医療者のチカラ”」

人生の最期をどこで誰とどのように過ごしたいかは、個人の価値観や家族の状況によって異なり、病状の経過によって変化する可能性がある。緩和ケア病棟が苦痛の緩和や後方支援機能を果たしながら、本人の意向を実現するために医療者・家族等が協力して関わった事例を示された。

2) 丸山典良（まるやまホームクリニック院長）  
テーマ「ACP から始まる在宅医療～これからの過ごし方と一緒に考えてみませんか～」

患者が在宅医療を選択した理由として「家族と過ごす時間を大切にしたい」「自分のペースで過ごしたい」といった回答が多い。妻を自宅で看取った 70 代の夫婦の事例を通じて、病状経過によって患者も家族も気持ちが揺れること、そして患者・家族・医療者が繰り返し話し合うことの重要性を示された。

3) 道法和恵（広島県看護協会訪問看護ステーション「こい」所長）

テーマ「訪問看護現場での意思決定支援」

在宅で看取りを実践する上で訪問看護がどのように意思決定の支援に関わっているかについて、2つの事例が提示された。ACPを実践したことにより、患者家族の満足度が向上する可能性が示され、訪問看護の役割についての理解が深まった。

4) 越部恵美（広島県介護支援専門員協会副会長）

テーマ「本人の語りを通して、自己決定を支える介護支援専門員の役割」

在宅療養を継続するためには、多職種が関わることが不可欠である。事例を通じて介護支援専門員が患者・家族の意向を尊重しながら、在宅療養に関わる多職種チームの調整や、生活支援などに重要な役割を果たしていることが示された。また、患者の自己決定を支援し、家族の不安や迷いなどにも寄り添う介護支援専門員の役割についても理解が深まった。

### III. 「ACP の手引き」の配布状況（資料 2）

第1版は平成26年3月5日から配布を開始して「26,672部」。

第2版は平成27年12月25日から配布して「61,062部」。

第3版は令和元年1月15日から配布して、令和7年3月31日現在「154,325部」となり、総計「242,059部」が県内外に配布され、普及啓発用ツールとして利用されている。

### IV. まとめ

以前のがん医療などでは、患者には正しい病名病状は伝えず、医師が決定する方針で実践するパターンリズムが一般的だった。その後、徐々に患者の知る権利、自己決定権、自律の原則が導入されるようになった。

平成9年（1997年）の医療法改正によって「インフォームド・コンセント」の実施が明記され、医療関係者が行うべき努力義務となった。しかし、1回の話し合いで意思決定することは、患者の気持が変化することを考えると課題も多かった。また患者の自主的な選択というより、医療者が患者家族を説得するための用語として使われることも多かった。

その後、患者の価値観を尊重した医療が求められ

る時代となり、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）が導入されるようになった。ACPは人生の最終段階になってから受ける医療を決めるだけでなく、将来自分の意思決定が困難になったときに備えて、事前に自分が受ける医療について、家族や医療者と繰り返して話し合うプロセスである。

わが国でACPを推進する取り組みとして、平成30年（2018年）厚生労働省から「人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会」の報告書が公表されたり、同年がん診療拠点病院指定要件が見直され、がん診療においてもACP導入を推進することが求められた。取り組みを具体的に推進するために「本人の意向を尊重した意思決定のための相談員研修会」などが開催され、平成30年（2018年）には国民への理解を広げるための取り組みとして、ACPに「人生会議」と併記することが勧められ、毎年11月30日を「いい看取りの日」と決めて、講演会や研修会などの啓発活動が行われている。

### V. おわりに

広島県地対協では平成25年度（2013年度）に「終末期医療のあり方検討特別委員会」を設置した。当初は、終末期患者に対する医療のあり方を検討することを目的とし、苦痛緩和のための緩和ケア推進や、終末期患者における患者の意思決定のあり方について検討した。

委員会を設置した当初は「ACP」という言葉を耳にする機会が少なかったため、委員会活動の目標として、「ACPは特別なことではなく、実践すべき当たり前のこと」とした。いずれはACPの実践を広島県の「地域の文化」にすることを目指して活動してきた。

広島県としてもACP普及推進員養成研修を実施し、普及推進員による地域活動を支援してきた。福山地区、廿日市地区など地域ごとにACP普及のための活動が積極的に行われている。

10年余りの取り組みで、ACPの理解は徐々に浸透しているが十分とは言えない。またACPの正しい理解について、「人生の最終段階に対する医療」「文書に残すことが目標」などの誤解や、「実施するタイミングが難しい」「認知機能が低下した方への実践方法」「気持ちが変化した時の共有方法」などの課題もあり、今後も検討を継続していく必要がある。

ACP普及促進専門委員会

# 人生会議の日、 豊かな生き方を考える

**令和6年**

**11月30日土**

**14:00~16:30**

**参加無料**

**300名**

※定員に達し次第受け付け終了

▶申込は広島県地域保健対策協議会ホームページへ！

広島県地域保健対策協議会 [検索](#)

▶問合せ先／広島県医師会 地域医療課  
**TEL.082-568-1511**

総合司会 広島県医師会常任理事 落久保裕之

14:00 開会挨拶 ━━━━  
広島県医師会常任理事 魚谷 啓

14:05~14:50 基調講演 ━━━━  
座長 ACP普及促進専門委員会委員長 本家 好文  
「いのちといのちの語り合い」

講師 社会医療法人石川記念会  
HIITO病院緩和ケア内科 部長  
大坂 嶽

休憩 ━━━━

15:00~16:00 シンポジウム ━━━━  
座長 広島県医師会常任理事 落久保裕之  
「ACPと歩む人生の物語」

JR広島病院緩和ケア内科主任部長 沖政 盛治  
まるやまホームクリニック院長 丸山 典良  
広島県看護協会訪問看護ステーション「こい」所長 道法 和恵  
広島県介護支援専門員協会副会長 惠美 越部

16:00~16:30 質疑応答など ━━━━  
16:30 閉会 ━━━━

主催：広島県地域保健対策協議会

## ACPの手引きの配布状況について

バージョン	所在	件数※	部数
第1版	県内	74	13,122
	県外	3	350
	合計	77	13,472
速報付録①		6,579	6,600
速報付録②		6,623	6,600
総配布数		13,279	26,672
第2版	県内	321	51,528
	県外	58	2,834
	合計	379	54,362
速報付録③		6,692	6,700
総配布数		7,071	61,062
第3版 (5/22時点)	県内	713	143,394
	県外	36	4,031
	合計	749	147,425
速報付録④		6,880	6,900
総配布数		7,629	154,325
総数			242,059

※件数は、ACPの手引きの配付（送付）を希望した件数であるため、実際の申請数とは異なります。

2025.03.31現在

広島県地域保健対策協議会 ACP 普及促進専門委員会

委員長 本家 好文

委 員 魚谷 啓 広島県医師会

沖政 盛治 広島市東区医師会

尾田 達史 広島市健康福祉局高齢福祉部地域包括ケア推進課

落久保裕之 広島県医師会

倉田 明子 広島大学病院精神科・緩和ケアセンター

小磯 卓也 広島市健康福祉局保健部医療政策課

越部 恵美 広島県介護支援専門員協会

小山 峰志 広島県地域包括・在宅介護支援センター協議会

道法 和恵 広島県看護協会訪問看護ステーション「こい」

戸谷 誠二 庄原市医師会

濱本 千春 広島県訪問看護ステーション協議会

藤原 雅親 東広島地区医師会

松浦 将浩 安芸地区医師会

丸山 典良 まるやまホームクリニック

山根 一人 広島県健康福祉局健康づくり推進課

山本恵美子 広島県健康福祉局地域共生社会推進課